

者たちに深く感謝しながら別れる。途中またジープがオーバーヒートで暗闇で水探し、さらにオイル不足で赤ランプがつき、スタンドで仮眠していた女性を起こしたりして、ホテルに帰着したのは零時半を過ぎ、みんなは心配して待っていた。

## 私のソ連抑留記

千葉県 佐藤 勇

——敗戦から入ソまで——

もう四十八年も前の事になるので、記憶は定かではないが、もう一度思い起こして戦争の空しさ、苦しかったソ連抑留生活のこと等、私自身が体験した思い出を記しておくことも無駄ではないと思う。

思えば昭和二十年八月九日午前九時頃のことであった。私は当時満州の孫呉の周辺の荒神山という小高い丘で陣地構築作業中であった。独立工兵第一八九四部隊三中隊川本隊に所属していた。昭和十九年二月十日、

現役で入隊し、丁度一年半にあと一日という日であった。分隊長として作業指揮をしていたが、遙か孫呉の街の上空で、まるで空中戦さながらの演習が始まった。と思い、全員作業の手を休めてその光景を眺めていた。二機の飛行機の周辺で砲弾が炸裂し、白煙が飛び交うけれどもいずれにも命中せず、間もなく一機は我々の上空を、ソ満国境方面に飛び去った。実は、これがソ連空軍機による孫呉爆撃の第一陣であり、これを迎え撃つ日本機との空中戦であったと伝えられた。九日未明には、ソ連軍による満州侵攻が開始され、我が軍は黒河をはじめ、到る所で壊滅的な打撃をうけ、撤退中という情報であった。しかし、日本空軍による反撃も迎撃も二度と起こらず、一方的なソ連機の孫呉空爆が繰り返され、燃え上がる街が真っ赤になって夜空を焦がした。

戦闘命令により、直ちに臨戦体勢に入ったが、これはもうご承知のように敗戦という姿で幕を閉じることになった。私達は八月十四日頃ソ連戦車本隊への斬込み隊として二十数名選出され、爆雷を抱え乍ら出かけ

ていったが、目的地でソ連戦車群には遭遇せず、十六日の未明全員原隊に帰着した。しかし戦況は悪化しており原隊の周辺の陣地は、既にソ連軍によって占拠されており、風向きによってはソ連兵の話し声が聞こえる程であった。それでも私達は、まだ「負けた」ということは聞かされていなかった。白旗は掲げられていたが、休戦したということだけだった。そして我々は、部隊長命令で翌十八日の未明、午前六時を期して一斉に突撃を敢行し全員玉碎の予定であった。その晩前面のソ連陣地では、赫々と焚火を燃やして明るく敵兵の動きも判った。我々の陣地では、煙草の火も敵の目につかないようにということで、まさに雲泥の差だった。更にこの急激な草原の変化に驚き彷徨う狼共が、夜中の歩哨のすぐ二、三米先まで近づき、爛々と青光りする眼でじっとみつめ乍ら、かすかな唸り声をあげてくるのには、眼前のソ連兵よりも恐怖心を煽られたものであった。午前六時、全員が日の丸で鉢巻きをし、突撃の命令を待ったが、八時まで何の命令もなく、間もなく銃を捨て帯剣をはずして一か所に集積して集合す

るようにとの事であった。投降という命令であった。無言の中で集結した時、一瞬にして緊張が解け、全身から力が抜け虚脱状態になった事を今でもはっきりと思ひ出すことが出来る。そして生きているんだ、助かったんだという思いがサッと脳裏をよぎった事も事実であった。

しかしこのことが、これからどうなっていくのか、敗戦国の兵隊が捕虜となることがどんなことなのか、皆目見当もつかないものであった。

兎に角ソ連軍の捕虜となり、一か所に集結させられて、点呼の度に身体検査というか持ち物を調べられて、時計や万年筆等はすべて彼等に捲きあげられてしまった。約千名位はいたであろうか定かではないが、暫く野宿させられているうちに、食糧の配給が悪くなり、野菜等が不足して来た途端、周辺の野草の採取が始まり、食べられると思うものはすべて採りつくしてしまった。そして一緒に何頭かいた軍馬も、アツという間に消えてしまったことは驚きであった。

初めて見るマンドリンを肩から下げて監視するソ連

兵に好奇の目を注ぐ者もあつたが、戦意喪失した部隊の空気は、虚脱感が溢れてしまい、果たして我々はこれからどうなるのかという話で、一週間程過ぎてしまった。この間何処からとなく聞こえて来た噂は、戦争も終わったことだし、いずれ近い中に川を下って日本海から日本に帰るようになる。若し体力のある者は、旧日本軍の兵舎にある物資を持てるだけ持って帰る方が得だろう、ということがまことしやかに流布されていた。

やがて移動の命令が出て、部隊は黒龍江の方に向かつて行進をはじめ、途中脱走を企てた者がソ連のコンボイによって射たれ、死亡した者も出たという。二、三日歩いて黒龍江に着いたら、大きな船が停泊しており、皆この船で黒龍江を下り、日本に帰るんだと思つて乗船した。全くこの時まで、私もよもや四年もの間、ソ連に抑留されるとは夢にも思つていなかった。我々の乗った船は、下るのではなく上流へと上がりはじめ、着いた所は黒河の対岸、ソ連のブラゴエシチュンスクであつた。はじめて騙されたと知り、怒つて見

ても後の祭りであつた。そして私は、このブラゴエシチュンスクより更に数日強行軍の末、ワジャエフカという地のソルホーズの収容所から、長い抑留生活に入ったのである。

## 慟哭のシベリア抑留で

### 垣間見たソ連

東京都 堀口卓也

#### 丸太積み

ホルモリンの収容所に入ってから私がそこを去るまで、一五〇大隊という呼び名しか記憶にない。そこが二二七収容所だと小池君に教えられるまで知らなかった。貯水場に山から切り出してきた材木を三段ぐらゐにてこで積み重ねる丸太積みが、ここでの私の作業であつた。五人ほどで、共同で作業するのであるが、危険な仕事であつた。斎藤准尉が小隊長で、尻を叩いてよく働かされた。何でソ連の仕事をこんなに精出して